

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十三年十二月十二日生

昭和十六年四月より昭和十九年三月 光海軍工廠に勤

務（山口県）

昭和十九年八月十五日 中部一三一部隊 特幹二期生

昭和二十年一月 満州第二気象連隊

十月 イルクーツク収容所

昭和二十二年六月 第一大拓丸にて復員

復員後は、故郷にて合併農協の管理職。その後、森

林組合の参事。くみあい人材センター。

現在は農協にて、結婚相談センター主任として活躍
されている。

温厚な性格と親切さは抜群、シベリア参にも数回
参加。

（愛媛県 山本 繁夫）

シベリア抑留記

愛媛県 田中 純

一、出生と職業

私は北条市に、大正十四年十一月、父佐次馬、母シ
オエの、姉二人弟一人の長男として出生。父親は尼崎
汽船の船員。

昭和十六年、北条尋常高等小学校高等科三年卒業。

同年四月、南満州鉄道株式会社哈爾濱技術員養成所
に入所のため渡満、二カ年の技術習得をする。

昭和十八年、奉天鉄道工場に配属、客貨車課に勤
務。

昭和十九年、突然の社命により公主嶺へ出張を命ぜ
られる。このことは一切他言しないではしいとのこと
で、簡単に身辺の整理をすませ、翌朝列車で公主嶺に
向かった。集合先の満鉄厚生会館に既に到着している
人達は、各鉄道局より選ばれた満鉄社員の集まりであ

った。受付をすませた人から順次、渡された地図に従って公主嶺戦車隊の兵営に集合させられた。

この部隊は、移動していった跡の空兵舎に振り分けられ入室した。徴兵検査前の青年は私と外に一人、あとは全て年配の方達。私もいずれ遠からず軍隊に行く身であれば、このような生活経験するのも味があった。

全員営庭に集合の指示があつて、副官（現役少尉）より、本日特命により軍属のみにて特設橋梁隊と特設工務隊の二隊をもつて通称一二四一部隊を編成する旨が告げられる。

部隊長は現役の長沼少佐、橋梁隊長は軍属で尉官待遇、工務隊長も同じである。小隊長及び班長は軍属で判任官待遇、その他の隊員は軍属で雇員待遇となつていた。

部隊長の訓辞によれば、この部隊は大陸鉄道司令官隷下にあつて、鉄道連隊を支援する目的で重大な任務を拝命している。最初の作戦は松樹と三十里堡の近くを流れる復洲河にかかる橋梁撤収で、鉄道第四連隊の

兵隊と合同で撤収作戦を完結す。

その後哈爾濱市にほど近い成高子の空兵舎に移駐し、次の作戦にそなえて訓練に当たつていた。その当時、原隊に赤痢が発生しているため、鉄道第四連隊の一部の隊が私らの部隊に足止めされ駐留していた。その隊の隊長が私の哈爾濱にいた頃の友人である千野君の兄さんにあたり、丁度千野君が面会に来ていたところで偶然に会うことになり、共に酒保でご馳走になり色々軍隊の話聞かせてもらった。この縁がのちのち生死の運命にかかわつてこようとは知る由もなかった。

二、徴兵検査と入隊

昭和十九年九月、奉天市のある小学校において一年繰り上げ徴兵検査を受け、第一乙種現役兵に合格、その後も橋梁隊にて任務についていた。

昭和二十年四月、牡丹江鉄道第四連隊第一大隊第二大隊に鉄道兵として入隊し、初年兵の厳しい訓練に明けくれる毎日だった。

昭和二十年五月、鉄道第四連隊は朝鮮方面の一部を

残し出動して行った。その後、昭和二十年五月末に鉄道第十九連隊が新しく編成完結されたが、引き続き初年兵として猛烈な訓練によって鍛えられていた。

昭和二十年六月、隊付衛生兵を志望する者は申告せよの達しがあり、私も応募し、簡単な筆記試験によって選考され、隊付衛生兵になるため牡丹江第一陸軍病院に派遣されたが、毎日毎夜、教官による講義は睡魔との戦いであった。鉄道隊の教育に比べると、眠気の我慢などさして辛くはなかった。

三、ソ連の侵入

昭和二十年八月九日早朝、非常呼集があり、「今朝ソ連軍が突如国境第一線を突破、怒濤の勢いをもって侵攻しつつある、教育派遣の兵はただちに原隊に復帰せよ」との命令が出され、病院を後にした。その時の病院内は、重症患者を後方移送するための担架がつきつきと運び出されて大混乱、さながら戦場のようであった。

原隊に復帰してみれば、日ソ開戦となった八月九日、大鉄作令により東満州鉄道の破壊、輪転機材料収

集をするため部隊を展開していた後で、兵舎は静寂であった。第一大隊と材料廠の本部は連隊に位置していた。

第一中隊は虎林線楊木、第二中隊は林口、第三中隊は代馬溝、第四中隊は穆稜、以上の出動命令によって展開していた。私は大隊本部で副官に衛生教育より帰還した旨の申告をすませ、命令を待った。作戦指揮所が石鹼工場に設営されているからその指揮下に入るよう命令を受け、医務室にて医薬品を衛生かばんと雑用に詰め込み作戦指揮所まで徒歩で向かい、ようやく線路脇にある石鹼工場にたどり着いた。早速衛生教育より帰隊した旨を申告し、本部付の衛生兵として任務についた。

四、大隊本部を追って一面坡へ

楊木、林口方面に転進していた一隊が二両編成の列車で帰って来た。有蓋貨車の中は負傷兵だけで、同年兵の田中東天は頬に貫通銃創を受け、両手で押さえたままで血液が固まり手を離すことができずにいた。列車を牡丹江駅に回送させ、大隊本部に連絡方を指揮所

に報告、その後の確認はできずそのままになった。

一夜明けて、我々も石鹼工場を引き揚げて作戦指揮所を牡丹江に移動したが、その光景に驚いた。駅のホームは、列車で避難する際身一つで乗車させられたのであろう、手荷物がホーム一帯所狭しと放置され、散らかされたままになっており、まことにあわれなことである。無人の日本人住宅街に至っては、満人による毎夜の掠奪にあつて無惨に荒らされ放題になっていた。駅前のデパートの内部の品物は何一つ残っていない程に荒らされていた。

連隊本部と第一大隊本部は、鉄道工場等の施設を爆破によって破壊した後、一面坡に移動して行った。我々もソ連軍の侵入してくる前に牡丹江を撤退しなければならなかった。線路上も道路も徒歩での難行軍が延々と続いていた。ソ連機がこれを目がけて超低空で機銃掃射の雨を浴びせかけてくる、その来撃のしつこさ、その度に「散開」の声がかかると蜘蛛の子を散らすように避難するけれど、その度に幾人かの死者と負傷者とが増えていった。携帯している消毒液のヨーチ

ンと赤チンもすでに使い切った。本人の服をちぎって止血をするありさまである。

拉古の駅でのこと、有蓋貨物列車が五両編成で停車していた。この機関車の釜が機銃掃射によって射抜かれ、蒸気が漏れて吹き出し動くことのできない状態であったが、駅にいれば他の列車に乗れるかも知れないという気持ちか、民間人や兵隊までも駅の周辺に群がって離れようとしなない。

私が入った貨物車の中をのぞき込むと、寝かされている負傷兵の一人が手榴弾を胸に抱いて自爆したため、更にもその破片によって惨憺たるありさま、地獄絵を見るようで目をそむけた。

貨物列車とホームの間に一人の民間人が落ちていた。この負傷者を手を借りて助け上げ、駅舎に運んで寝かせカンフル注射を打ってあげると、「私は徳島県麻植郡出身の開拓団員で、拉古までたどり着いてこの難に遭った」そうである。私の手を握りしめ「カンフルありがとうございました」「私も四国です」と言うのと、「そうですね、日本に帰られたらこの懐中時計を

四国のどこにでも埋めてやって下さい」と最後の言葉を残して、少しずつ弱りながら息を引き取った。まことにあわれでならない。

このような惨状を放置したままに横道河子に向かつて逃げて行くようで、私には釈然としないものがあった。横道河子に入ると、道路から坂を少し登った所の満人の家屋に泊めてもらい、作戦指揮所からの命令を待っていた。十六日に至って食糧調達から帰って来た者の話によれば、戦争はすでに終わったとの噂が流れているようで、十七日にはその噂が現実となり、終戦の知らせと武装解除が告げられてきた。

五、泥棒猫戦略

今にして思えば、なるほどとうなずける二つの理由があったように思える。

関東軍の戦備のほとんどは日本本土防衛に回され手薄になっていた。ソ連軍にとって、当時の国境陣地を突破することなど至難でなかった筈だ。その当時の関東軍第一線陣地をもってしてもソ連軍を迎撃するだけの兵器弾薬が充分でなかったのだから、やむを得ない

だろう。まして、どの部隊も新兵と在満朝鮮人によって編成されたばかりで、到底戦力となり得ないこの時期こそ、対日参戦に踏み切るタイミングだったのではないか？

日本軍が連合軍に降伏しないうちに満州国に侵攻する絶好の時期であり、ソ連側も多少の犠牲や陣地の抵抗があることは覚悟の上で、重装備された機械化部隊が重戦車を先頭にたちまちにして北滿を席卷し、さらに南進を試みる。この迅速な攻略は、あらゆる物資や設備を戦利品として掠奪し確保するという目的が隠された作戦であったように思える。

六、武装解除

横道河子の駅前広場で銃と帯剣はトラックに山のよりに積み上げられた。

自動小銃の銃口を下に向け肩ごしに背負っているソ連兵は、満州で見かけていた白系ロシア人とは顔つきからして別人種を見るようであった。これらソ連兵の行動にいたっては、目ぼしい品物をすべて掠奪していた。婦女子をみれば飢えた野獣のように襲いかかって

犯す。これらの暴挙から逃れるすべもなく自殺を選んだ人もいたと、引き揚げて来た民間人からこのような悲惨な話を聞いた。

我々も丸裸にされた捕虜の身、これから先どうなることか、疑心暗鬼で抵抗する気力も抜け、もと来た道を牡丹江に向かって監視兵に追い立てられながら夢遊病者のようになって歩いてきた。私の汚れた雑のうに僅かの薬品が残されていたが、それすら重苦しく、隊列について歩くのが精いっぱい、長蛇のように延びた列から我慢しきれず用を足そうするが、忽ち左右にいる監視兵に追いまくられ仕方なく袴下の中に漏らす下痢患者等を連れての難行軍であった。拉古に入り、預かっていた懐中時計もすでに掠奪にあり、なくなっており、駅の方角へ手を合わせ詫びた。

少し進んでのこと、戦死者の遺体が道端にうつ伏せになって、むき出しになっている部分が大きく膨れあがり蟻がたかっていた。これが誰にも埋葬されることなく、家族にも知らされることなく朽ち果てるかと思えばまことに残酷なことで、怒りとも悲しみとも何と

もいたたまれぬ思いであった。

小高い丘になっている一帯に間隔を置いて並んでいるレンガ建ての弾薬庫跡が拉古捕虜収容所で、周囲に有刺鉄線が二重に張り巡らされ、ソ連兵の厳重な監視がなされていた。ここに次々と収容されていった。我々も一つの倉庫に押し込まれた。内部はまぐさが敷き詰められていたが、火薬の臭いが少し残っていた。

ここでの一日はソ連側の使役と自分達の食糧の確保が大切な仕事だった。ソ連側の作業は、貨物廠での物資の積み出しや施設の撤収にかり出され、日がたつにつれ体力が次第に減退し、栄養失調によって瘦せる者が目立つようになり、下痢患者も続出、防疫をほどこすことのできぬ中、すでに血便を排する者さえ出る悲惨な状況になってきた。しかし旧軍隊の階級意識や軍規が残っているので、私達初年兵は二重の苦しみに耐えていかなければならなかった。

ある日、奇遇にも千野曹長にお目にかかり、あの悪辣な軍曹の無法きわまる制裁と酷使から逃れることができた。雑のうに隠し持っていたクレオ水液のみが掠

奪から難を逃れて残っていた。これはソ連兵といえども欲しくなかったのであろう。この水液を使って、トウキビの糖に焚き火のあとの炭を混ぜて練った物を丸め、正露丸のような丸薬を作った。おかげで下痢を経験することなくすんだ。今なら薬事法違反で罰せられもするが、当時のような極限状態におかれた捕虜生活の中で延命は、自分自身で厳しく処していかなければならなかった。

七、入ソと雪中行軍

十月中旬になって、荷役作業から帰った連中が、煙突つきの赤い有蓋貨物車で日本軍捕虜が日本に帰るため綏芬河經由ウラジオストク港に運ばれている、この話で、たちまち収容所内はダモイの噂でもち切りになった。収容所でも作業大隊が編成され、数日後、乗車地牡丹江に向けての行軍が徒歩にて始まった。その悲惨なこと、言いようのない難行軍であったが、何としても祖国に帰るといふ望みがあったからこそ人について歩くことができたようだ。

牡丹江の操車場にしたてられた有蓋貨物車の中は左

右に上下二段の座が作られ、約五十人ずつが乗れるようになつていた。夜間は灯火がなく真つ暗で、横たわっているばかりだった。停車するたびに戦利品をソ連領に運びこむ長い貨物列車が相当な速力で通過していった。ウラジオストクなら南に下るはずだが、列車は北に向かつて進んでいたようで、疲労と栄養不足によって体もますます衰弱していった。ハバロフスクの手前のような所で、この作業大隊からも多数の病人が列車から降ろされて、入院のため連れて行かれたようであった。

ハバロフスクの駅に停車することもなく再び北に向かって列車はシベリア本線を走り続け、イズベストコークワヤに停車、真つ白に雪化粧したシベリアの大地に下車させられ、長い旅で体力も消耗し半病人のような体に寒さがさらに追いうちをかけ、立っているだけがやっとの体を気力で支えながら近くの収容所に入った。

十一月三日、この収容所で一夜を明かし再び徒歩にて奥地に向かった。夏服の薄着での雪中行軍、それに

加えて猛烈な繁殖力で虱が襲ってきた。この三日三晩の行軍で初年兵達は、飯盒や炊事用に使うブリキ缶を背中に背負い、日に日に寒さが加わるその中を、精いつばいの力を振り絞り、黙々と言葉もなく野営を重ねながらタランジャ二〇四捕虜収容所にたどり着いた。三晩の野宿は、積もった雪をかきのけ附近の原生林の枯れ木を拾い集めて朝まで火を絶やさぬようにして外気から身を守らなければならぬ。こんなソ連の仕打ち、人種こそ違え、これが人間としてやることであろうか？

この二〇四収容所において、おおかた掠奪した戦利品と思われる防寒靴（バレンキー）、フェルトでできた長靴に綿入りの満人服と防寒帽、防寒手袋を渡された。復興のために日本軍捕虜の労働力、満州全土の物資をいち早くソ連領に運び込んできた品物である。

八、収容所での生活の惨状

虱の駆除も熱風乾燥によってようやくおさまった頃、医務室の人手不足のために勤務を命ぜられた。増え続ける下痢患者、下痢による脱水症状の患者、栄養

失調により瘦せ細り歩行もできない患者、凍傷によって手足を切断しなければならぬ手前の患者など、いずれも正月前後が一番ひどかったようである。

幾日かおきに貨物自動車に来て患者をテルマの病院に運んだ。二〇四捕虜収容所においても幾人かの戦友が哀れにも帰らぬ人となっていった。死亡すれば医師（フラーチャ）の指示で堤衛生軍曹と二人で別の倉庫に安置した。それは名ばかりの、火の気のない所の土間に並べて置くだけ、運搬車が来ると他の収容所の遺体と共に凍結した荷物同様に行く先も知れず運ばれて行った。どうしてあれだけの日本軍の医療器具、薬品を運びこみながら一粒すら飲ませずに死なせるのか、ソ連側の命に対する軽々しい行為に憤りを感じた。ひどい下痢患者の中には起き上がることもできぬ程衰弱がひどく、そのまま排便している者もあり、その汚物の処置もできず悪臭が室内にただよっていた。炊事場に頼んで雑穀のおもゆを作ってもらい食べさせようとするけど、食べる気力もなくしていた。まさに生き地獄にいるようであった。

昭和二十一年三月末になると厳しい寒さもゆるみ病人も少なくなり、幾分心に安堵感が出てきた。その矢先に他分所への転属要員となって移って行くことになり、徒歩で出発した。奥地ではないかとの不安があったが、すぐ隣の二〇五收容所で、ヤウリン河に面した広々とした平地にあった。ここの大隊長は温厚な後藤大尉、中隊長は背の高い厳格な猪股中尉、軍医は安藤中尉、ロシア語が非常に堪能な田村通訳。この四人の人は兵隊達に強く信頼されていた。それ故に規律はしっかりとして保たれ、全員揃って帰るんだとの強い意識をもって統率されていた。

九、芸は身を助ける

極寒期（マローズ）も過ぎ、いよいよ本格的な作業が開始される前のある日、全員が整列している前で通訳より「この中に、少しでもロシア語で氏名の書ける者がおれば申し出るように」との達しに、私は半信半疑であったが、そのことを受ける旨申し出た。少し簡単な質問があつて、毎朝事務所に行くことになった。作業割り当ての氏名をロシア語で書くのが私の仕事に

なつた。

事務所では毎朝、昨日の作業の進行、遂行、ノルマについては、作業監督（カマンジール）と收容所長（ナチャーニック）の間でいつも睡をとばしての大激論の末決められているようだった。通訳の話によれば、收容所長はノルマがきついでから腹が空いて作業能力が上がらないのだと言ひ張り、作業監督の方は管理が悪いから作業の成果が上がらないのだとなじり合っているようだ。そんな喧嘩をするよりも少ない捕虜の食糧をくすねることをやめると叫びたかつた、それ程ソ連の食糧事情が悪かつた。満州での戦利品でしのであらうことがうかがえた。所内でも幾人か作業に出ず、炊事、浴場、縫製、靴修理、水汲み、被服、糧秣庫、器材庫において作業に従事していた。ソ連側の頼まれごとをすると感情的なノルマをもらつていた。芸は身を助けるということでしょうか。これらのノルマを全員にませ合わせ、大中小に振り分けて各人のノルマとした。

ロシア語で日本名を書く場合、活字を並べればすむ

というものでもなく、一例をあげれば大野と小野、大田と小田などである。「オオノ」「オノ」はOの頭に力点を打って「オウ」と強くなり、「オノ」はOの頭に力点を打たずにOH Oと書けば「アノ」と発音が近くなり、通訳に随分世話をかけていたようであった。

入ッした二、三年の間のノルマによる食糧その他の物の受領は、正確さを欠いていた。なぜなら、国の機関によって決められている工事に対しての計画量を、工期の短縮と予算の節約がカマンジール達の功罪に即関係してくるので、なるべくなら事情のいかんを問わずノルマを小出しにしていたのではなかったかと疑っていた。

十、鉄道敷設工事

昭和二十三年、三回目の冬を迎える頃より民主運動が盛んになり、作業においても自主的な運営をしようとする気風が芽生え、望んでも不可能なら白らの努力で生活を改善していこう、そうして元気で一日も早く国に帰れるよう頑張ろうと自覚するようになった。春も近づき、路盤整備と排水のための側溝工事が始まっ

たが、これに使用される道具は斧と木製の一輪車と大鋸及びつるはし、他の機械器具等はドイツと関東軍からの戦利品であった。土木の経験があつた佐々木兵長、この人は作業監督にとても信頼されていた。名古屋工専を卒業した土木専門の技術者だそうで、おかげでこの人の指揮によって作業能率がぐんと上がり、ノルマの獲得に大変功績があつた。それ程ソ連人の知識が日本人に比べて劣っていた。

鉄道敷設のうち、レール敷設はソ連の囚人によってなされた。その後の枕木の下に砂利をつめ込む作業が捕虜によってなされた。この砂利は決まって真夜中になると貨車いっぱい積んで運んで来る。ひどい時は朝方にもう一度砂利おろしがあつても、この分のノルマの増量は別になかった。夜の作業ではブトの襲撃で顔がかゆくて腫れあがつていた。さらに日中の作業時間も八時間が要求され、眠い目をこすりながらおろした砂利を線路内にかき込み、次の列車がどうにか通れるようにしておく作業がくり返されていた。今夜もあるの汽笛とカマンジールの「ダワイ、ダワイ」の声にせ

きたてられ叩き起こされるかと思うと身の細る思いであった。このような無謀に作業大隊長や通訳が抗議したが、これだけはソ連側も譲る姿勢は少しも見せなかった。

十一、健康診断と練成隊

小隊毎に週一度の入浴があった。これは温かくした浴室で、最初の桶の一杯の湯で洗濯石鹸を体になすりつけ、手で垢をすり落とす。あと一杯の湯で体をゆすぐ、これが入浴である。下着は入浴の度に洗濯された物が渡された。タオルがないから拭かずにぬれたまま身につけた。一カ月毎にソ連側の医者により健康診断があった。ただ裸にして尻の張り加減によって一級から四級までの健康度の判定があり、これによりランクづけされた。四級になればテルマの練成隊収容所に転属させられた。三級の者は収容所内の軽い作業に当たった。あとの一、二級の者が作業要員で、その数が少なくなければなる程作業の遂行が遅れてくるために、他の収容所からの転属による増員が望まれた。私は痩せもせず肥えもせず常に一級を通し続けていられたの

は、他の者に比べてあまりきつい作業をしなかったためであろう。

昭和二十四年三月になって、保線管理人(マッセル)に連れられて保線工事作業に出、凍結によるレールの持ち上がりや線路の間隔を点検しながら進んでいる時ふらふらと目まいがして倒れ、翌日テルマの病院にて診察を受けたのち練成隊にとどめられ休養をさせられ、四月の初め「アブローチナ」の捕虜収容所に転属した。

この収容所での作業は、火力発電所の建設と伐採が主な作業であったようだ。極寒期の凍結した河の底を深く掘り下げて、大きな丸太で外枠、中枠、内枠三つに仕切られ、枠と枠の間に石を詰め、胴張りを三段、これを中心りで支える工法がとられ、天井も三段に区切られた工法で塞ぎ、中の水槽より冬場でも発電所に必要な水量を確保するための難工事を我々戦友の手によって完成間近までに仕上げられていた。これは相当な労力と危険な工事で、よく頑張ったものだと思われる。私達は発電所の基礎工事に駆り出され、深く掘り

下げられた穴の中に鉄筋を組み立て、また、配管作業等の軽い作業に従事し、帰国の順番待ちをする毎日だった。

アプローチナでようやく待ちに待った帰国の日を迎えることになり、一路ナホトカ港に向け、今度こそ本当にシベリア本線を南下して行つた。

十二、祖国日本へ

帰国手続きも無事に済み、ナホトカ港に接岸している信洋丸の前に整列していながら、なお引き戻されそう度、一抹の不安で身が引き締まる思いがしていた。

ソ連側の読みあげた名前の順に乗船が許され、タラップをのぼりつめるまでは我が身であろうかと思う程身も心も引き締まって、振り返るのも恐ろしいぐらいで、船が岸を離れ沖に出るまで喜びの感情は湧かなかつた。何もかも目を覆いたくなるような残酷非道の掠奪、シベリアの極寒、飢餓の恐怖、病魔、これらとの苦闘、どれを思い出しても生き地獄の四年間であつたが、耐えることができず、祖国への望郷の思いもむなしく散つた戦友の無念を残したままに、船は祖国日本

に向かつて進んだ。

私は昭和二十四年八月の終戦より四年目にやっと懐かしいわが家に復員することができましたが、いつまでも年老いた両親に甘えていることもできず、働かなければなりませんでした。しかし、人の口は恐ろしいもので、狭いところなので、すぐに「あれは赤だ共產党だ」との噂で、なかなか町の人に迎えられたようには思えませんでした。このようなことで、就職の障害になつたことは事実です。それゆえに勤めようとする意欲も薄らいでいったように思います。

その当時、中予地区一帯の海岸線は南海地震によって地盤沈下が激しく、防潮堤工事が進められていたので、日雇い人夫をすれば細々と生活することはできました。農家の人たちも現金収入を得るために暇な時は片手間仕事としてともに働きました。彼らの話を聞いていると、戦争に敗けたことがあたかも百姓に幸運をもたらししてくれたようなことを口にしていましたが、我々町民にはどうしようもない腹立たしさが感じられ

て、食べ物を持っている百姓は本当にうらやましいなあと思ったものです。米麦は統制であるために町民は配給だけで腹を満たすことができず、米にたよらざるを得ず、農家は米を闇に流すことで容易に金儲けができたようですから、特別にうらやましが強く印象として脳裏に焼きついているのでしょう。

その頃、愛媛県が単独で海岸工事をするようになり、そこで働くこともありましたが、昭和三十八年四月、愛媛県立松山職業訓練所にブロック建築科が新設されるに当たり指導員として採用されることとなり、昭和五十七年三月までの二十年間、職業訓練に従事いたしました。

訓練生は失業保険受給者、中でも中高年齢者を対象としていたので、私よりも年長者が多く、教えるより教えられることが多くあって随分為になりました。

職業訓練は心を研磨する道場だとよく人に語ったものです。この人たちは既に戦前戦後の苦難の中での色々な体験をされ、社会経験の豊富な方ばかりですから、一方的に無地に色づけするようにはいきません。

このことがややもすると技能修得の障害になるようです。なかなかすんなりと納得し受け入れてくれません。自分の経験によって自分なりの仕方をするので、新しいことを修得するのに長い時間がかかります。特に高齢退職者に至っては、失業保険を受給するためだけに入所してきているようでした。しかし中には真剣に取り組もうとする生徒も見受けられ、私たちの励みにもなり、このような訓練生にはこちらが一生懸命にならざるを得ませんでした。このような人のみが現在立派な職人として活躍をされています。これで生活しようとして新しい技能を身につけることは大変です。どの人でも初めは心がぐらついて、一時期は迷っているようです。こんな時には常にあらゆる面で興味を湧き出させるのに色々苦心をいたしました。人の心を動かすことは口先ではない、指導する者の熱意のみがその人の心をとらえ、我々の努力を理解し、ついてきてくれるのだとしみじみ感じさせられる二十年間の勤めであります。

退職をした昭和五十七年七月、松山コンクリート協

同組合においてJIS表示許可工場の資格を取るために協力してもらいたいとの話がありました。ブロック建築の施工についての技能と知識に多少の心得はあっても、JISの求める均一な規格に合った製品ができるまでの製造設備、製品検査、使用骨材の受け入れと検査及び工程管理ができるような体制をつくり上げるための知識はありません。このようなことが果たしてできるだろうかと疑問がありました。建設現場で身をもって覚えた技術と訓練校における二十一年間に学習したコンクリートの知識があったからこそ、JIS表示許可の申請ができるまでの資料を整えることができました。昭和五十八年二月通産局に申請書を提出し、おかげをもって昭和五十八年五月にJIS表示許可工場として認可されることになりました。現在に至っても松山市坪西町松山コンクリート協同組合の囑託として品質管理を行い、現在でも、少しでも良い規格品を使って頂けるよう頑張っていきたいと願っています。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十四年十一月一日生

昭和十六年 南満州鉄道株式会社ハルビン技

術員養成所

昭和二十年四月 牡丹江鉄道四連隊

〃 〃 八月 横道河子にて終戦

〃 〃 十一月 テルマ地区二〇四收容所、二〇

五收容所、アプローチナ收容所
にて強制労働

昭和二十四年八月 復員

戦後は土木作業、ブロック建築指導員、訓練工養成教員、松山コンクリート協組の品質管理業務に従事。

温厚な人柄と努力家である田中さんは、職場にて信用を集め、多数の後輩を育ててきた。

(愛媛県 山本 繁夫)